

DXのプロが選択、Netskopeでゼロトラストを導入 攻めるセキュリティで産業構造変革を加速

導入事例

+

企業のDX支援により産業構造変革を推進するINDUSTRIAL-X。スタートアップの同社は、ビジネスのスピードや変化に応えるべく、フルクラウド基盤で積極的にクラウドサービスを活用しています。サイバー攻撃が増加するなか、クラウドサービス活用による生産性向上を図りつつ、セキュリティを確保するためにゼロトラストを導入しました。DX推進のプロとして、DXを支えるゼロトラスト製品にNetskopeを選択。自社の課題解決とともに、ノウハウを含めてショーケース化し、企業のDX推進を安全に加速させていきます。



INDUSTRIAL-X
DIGITAL/PHYSICAL/HUMAN
TRANSFORMATION PLATFORMS

組織概要

業界	地域	設立	従業員数
コンサルティング業	日本	2019年	40名 (業務委託を含む)

株式会社INDUSTRIAL-X

<https://industrial-x.jp/>



株式会社INDUSTRIAL-X
CISO
(Chief Information Security Officer)
大久保 英徹 氏

事業拡大を支えるゼロトラスト クラウドサービスを積極的に活用しつつセキュリティを確保

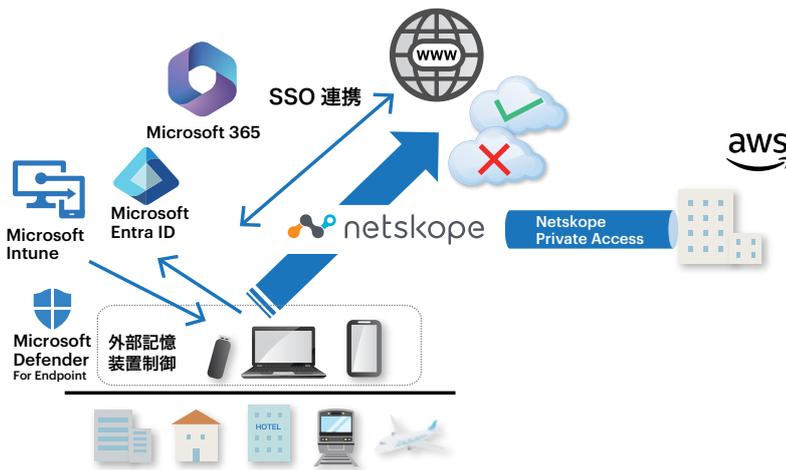
2019年設立、日本の将来に問題意識を持ち、産業構造のアップデートに取り組むINDUSTRIAL-X。DXに必要なリソースやノウハウをカタログ化し、マーケット全体で有機的に活用できるプラットフォームの構築により、日本企業におけるDX推進のスピードアップを図っています。また、独自のDXメソッド、伴走型プロフェッショナルサービス、DX人材育成支援なども提供し、DX推進のすべてのプロセスをトータルサポートします。

昨今、サイバー攻撃が拡大するなか、DX推進におけるセキュリティ対策の重要性は一層高まっています。2023年にDX推進のプロである同社は、自社の事業拡大にともなうリスク回避と、社内実践で得たノウハウをお客様に還元するべくゼロトラストの導入検討を開始しました。同社のゼロトラスト導入背景について、INDUSTRIAL-X CISO 大久保英徹氏は話します。

「当社は、社外で業務をおこなう社員も多いのでハイブリッドワークを導入しています。また設立6年のスタートアップであり、変化に柔軟に応えるために基幹システムも含めてインフラはフルクラウドです。さらに生産性向上や、DXに役立つ新技術の試行などクラウドサービスを積極的に活用しています。当社自身もDX推進の先頭を走っており、セキュリティも従来の境界型防御では守りきれません。クラウドという1つの傘の中ですべてのデバイスを守るゼロトラストが必要でした」

DX推進のプロの観点から、ゼロトラスト導入のポイントについて大久保氏は指摘します。「大事なのは、攻めるセキュリティによりビジネスの成長を支えるという視点です。生産性とセキュリティのバランスをいかにとるか。当社のゼロトラストは、ルールですべて縛るのではなく、ユーザーは自由にクラウドサービスを利用できるけれど、ゼロトラストによってガードレールのように危険からユーザーとデータを守るという考え方です」(大久保氏)

システム構成図



複数のゼロトラスト製品を検討しNetskopeを選択 ゼロトラストのベースとしてアドバンテージ

同社は、複数のゼロトラスト製品を検討し、クラウド型セキュリティプラットフォームNetskopeを選択。理由について大久保氏は説明します。「脅威からユーザーを守るガードレールの役割をしっかりと果たすことができるのがNetskopeでした。クラウドサービスの利用状況を可視化し、監視・制御がおこなえるCASB (Cloud Access Security Broker) 機能は、アドバンテージがあると思いました。メールサービスも、個人用か会社用かアカウントを識別して制御できます。前職でフルクラウドを構築する際も、Netskopeがセキュリティの肝となりました。利用状況の可視化は、ゼロトラストのベースとなります。セキュリティ対策を打つ判断材料に加え、万一サイバー攻撃を受けた際に、Netskopeのログデータに基づき説明責任を果たすことも大きなポイントです」

2024年1月、同社はゼロトラスト実現に向けてNetskopeの導入を決定。また技術支援パートナーとして、Netskopeの販売実績と知見を豊富に持つネクストモードを選定しました。

Netskopeによるゼロトラストを全社展開 運用ノウハウの蓄積により要望対応も迅速化

Netskope導入決定から3カ月間をかけて、情報システム部門で既存のクラウドサービスを利用できるかを検証しました。「利用できなくなったり、ユーザーに見える挙動が変わったりするケースがありました。Netskopeが原因というよりも、ブラウザの仕様などとの組み合わせによる影響が大きいと考えています。原因を突き止めて、通常業務に支障がでないように、Netskopeの設定変更などで解決しました。社内ですべて解決できなかった時は、ネクストモードにサポートしてもらいました。当社からの相談に対するレスポンスも早く、課題解決の迅速化に貢献してもらったと思っています」(大久保氏)

2024年4月に、Netskopeによるゼロトラストを全社展開。「新しいアプリを使いたいけれど上手く動かない」といったユーザーからの問い合わせに個別対応していると大久保氏は話し、こう続けます。「社員側も、個人用PCだと問題ないが、会社用PCだと動かないなど検証してくれる人も増えてきました。また、運用ノウハウの蓄積によりクラウドサービス利用に関する要望に迅速に対応できるようになりました」

生成AIのクラウドサービス利用も可視化 自社の取り組みをショーケース化しお客様に還元

Netskopeは、クラウド型プラットフォームのため、ユーザーの端末にエージェントのソフトウェアをインストールするだけでサービスを利用できます。「今までと変わらずにクラウドサービスを利用し、ユーザーが意識することなくセキュリティが確保されている状態の実現を目指しました。Netskopeにより懸念だった、『誰が、いつ、どのクラウドサービスを利用したか』をログでトレース可能となりました。ポイントは、現在だけでなく新しいサービスにも対応できるという点です。生成AIのクラウドサービスを利用するユーザーが増えていますが、それも可視化できています」(大久保氏)

Netskopeで収集したログはセキュリティだけでなく、ビジネスの観点で利用する取り組みも進められています。「有償のクラウドサービスを契約したものの、ほとんど利用されていないケースがあります。利用状況の可視化によりクラウドサービスの効率的かつ効果的な活用を実現できます。また、ハイパフォーマンスな社員におけるクラウドサービスの使い方を明らかにするために、ログをもとに『生産性とクラウドサービス利用の関係』の分析にも取り組んでいます」

Netskopeによるゼロトラストの今後について大久保氏は話します。「利用者側が重要データの活用を判断するといったシーンをなくしていきたいと思います。重要データを特定し監視・保護するDLP (Data Loss Prevention) によりシステムでガードする仕組みも検討中です。また、すべての通信を制御するCloud Firewallや、脆弱性を抱えるVPNではなく、セキュアに社内システムにアクセスできるプライベートアクセスなどの導入も視野に入れています」

同社では、Netskope導入後1年以上が経過し、運用ノウハウや知見が蓄積されてきました。「ゼロトラストとクラウドサービスの使い方に関して自社の取り組みをショーケース化していきます。そこで得られたノウハウや知見を、お客様のDX推進にも役立てていきたいと思っています」(大久保氏)



SASEのグローバルリーダーであるネットスコープは、ゼロトラストを原則としてAI/MLを活用したデータ保護を行っています。サイバー脅威から企業を守り、セキュリティとパフォーマンスを妥協することなく両立し最適化に導きます。1つのプラットフォームで新たなエッジネットワークの構築、リスクの低減、そしてあらゆるクラウド、ウェブ、アプリケーション通信において卓越した可視性を提供します。詳しくはnetskope.com/jpをご覧ください。